

ネガタロス鎮守府（謎）

Lost

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ネガタロスがネガタロス軍団（仮）の代わりにネガタロス鎮守府（謎）を作るようです。

# 目次

悪の鎮守府	1
仕事と一本釣りとクツキ	25
あれもこれも、全部前座	50



# 悪の鎮守府

---

ネ「俺の名はネガタロス・・・言っておくが、俺の目的は『悪の組織』を作ることだ。」

とある国の、とある鎮守府。

そこで行われた、新提督の着任式。

着任早々、そう言い放った『新提督』に、多くの艦娘が頬を引攀らせていた。

前任者が深海棲艦の攻撃で死亡して、早3ヶ月。

勿論、最初は誰もが提督の死を受け入れられず、悲しみに暮れる日々を過ごしていたが、鎮守府のリーダーである長門、第1機動部隊を率いる赤城と加賀、そして、提督の忘れ形見のような存在の吹雪たちの尽力によって、艦娘たちは徐々に回復し、鎮守府は元の日常を取り戻して来ていた。

そんな折、遂に大本営から新提督着任の伝達があつたのだ。艦娘たちは、提督の死を乗り越えてより一層の絆を結び、新任者を迎える覚悟を決めた。

そして、遂に今日、新任者が着任した。

うん、した。したのだが……

ネ「俺は来るものを拒まない……俺とともに、『悪の組織』を立ち上げたいと言う者はいないか？」

壇上で訳の分からぬことを言い出す新任者。

というか、悪の組織？いや、ココ鎮守府なんデスケド・・・・・・・・所謂バリバリ『正義』を振りかざして戦ってる人たちの基地なんですけど・・・・・・・・

大丈夫なんだよな・・・・・・・・大丈夫なんだよなあコレ・・・・・・・・

そんな視線を長門に向ける艦娘が多数。だが、当の本人は、提督の姿を見た瞬間に立ったまま気絶していた。

何故世界のビッグ7の長門を、提督は立ったまま気絶させられたのか？

それは、その提督の容姿にあった。

全身を黒い装甲・・・・・・・・装甲？皮膚？皮膚だったら全裸なんですけど・・・・・・・・

・・的なもので覆い、まっくろくろすけな顔に煌めくのは、赤く燃える二つの眼。

特筆すべきは、その側頭部に生えた『突起』だろう。三日月のようにカーブした、その黒い突起は、間違いなく『角』であつた。

そう、新提督・・・・ネガタロス提督は、どこからどう見ても『ヒト』の姿をしていなかったのである。その姿は、パツと見『黒い鬼』だつた。小さくて可愛いものが好きな長門からすれば、その姿はまさに『テロ』であつたのだ。

大「で、では・・・・ネガタロス提督に、何か質問のある方はいらつしやいませんか・・・・？」

いち早く硬直から抜け出した大淀が、艦娘たちに言葉を投げかける。

とはいえ、正直誰も何も言い出さない。というか、言い出せる猛者がこの場にいるな

ら、彼女らの戦争はとつくに終結している。

悪の組織を作るって言ってるぐらいだから、多分この提督は『悪』のヒト……  
ではなく……何だろうコレ……『何か』なのだろう。

『悪』と聞いて艦娘たちが真つ先に思い浮かぶのが『深海棲艦』である。

あの得体の知れない存在に、今まで多くの仲間が倒されて来た。

紛れもなく奴らは『悪』だ。

悪なのだが……

ネ「遠慮することはない……これから俺たちで、『正義に勝つ』悪の組織を作るんだ」

さつきから周りの空気を見無視しまくって悪の組織への勧誘を続けるネガタロス提督。

何故だろう・・・見た目も、立ち上げようとしている組織も『悪』なのに、何故か恐れを抱かない。むしろ、どこか抜けているような・・・そんなヒト・・・『何か』であつた。

シーンと静まり返るホール内。見兼ねた大淀が、演説を中止しようと、一步ネガタロス提督に近づいた。

警報が鳴り響いたのは、その直後だった。

赤「・・・ツ!?! 敵襲!?!」

金「テートクの着任式中に・・・許しませーん!!」

長「第1機動部隊、出撃だツ! 心してかかれツ!・・・我々はもう、提督を失うわけにはいかないツ!!」

放心状態から復帰した長門の指令により、慌ただしくホールから出て行く艦娘たち。

長門の発した、先の提督への思いを胸に、いつもより気合を入れ、艦娘たちは鎮守府から出撃して行つた。

ネ「・・・・・・・・長門、だったか？」

長「は、はあ・・・・・・・・どうされたのです？提督。」

ネ「今、我々は攻撃されているのか？」

長「・・・・・・・・ええ。提督が着任される前、前任者の命を奪つた・・・・・・・・深海棲艦によるものです」

ネ「つまりは・・・・・・・・その深海ナンチャラとやらは、我々の『敵』か？」

長「え・・・・・・・・ええ、まあ・・・・・・・・」

この時、ネガタロスの中で、ある方程式が立てられた。

我々を攻撃して来たⅡ我々の敵Ⅱ正義の味方Ⅱ処刑。



金「ムウ、手強いデース・・・」中破

榛「は、榛名は・・・まだ大丈夫です・・・」大破

吹「どうしよう・・・このままじゃ・・・」小破

第1機動部隊は思わぬ苦戦を強いられていた。

それもそのはず、敵には赤い戦艦ル級・liteも混ぜていたからである。通常より強化された個体である・liteに率いられた敵艦隊は、かなりの強敵として知られていた。

赤「弾薬も艦載機も残り少ない・・・」中破

天龍「チツ・・・マズいな」中破

加「一度応援を要請しましょう・・・どちらにせよ、私たちだけでは勝てないわ」小破

赤城はグツと歯を食いしばって敵艦隊を睨んだ。

提督の命を奪った奴らに、屈辱の敗退を喫してしまうなど、断じて受け入れられるものではない。

しかし、このままでは前の提督だけでなく、この第1機動部隊からも死者が出てしまう。それだけは、旗艦としてしてはならない行為だ。

となると、残された道は……ただ一つ。撤退だ。悔しいが、それしか道はない。

赤城が撤退を口にしようとした、その時。

プワアアアアアアン!!!という汽笛が後方から聞こえた。同時に、金属の擦れ合うスキール音も。

加「……まさか、もう応援が……？」

天「いや……今のはどう考えてもフネの汽笛じゃねえだろ？」

金「この sound……間違いアリマセーン、『express』のモノデース！」  
棒&吹「え……えくす……？」

金「ノーノー！『express』！所謂『急行列車』ネー！！」

赤「……まさか……こんな所に列車が来るわけ……」

ない。2秒前まではそう思っていた。

だが、赤城が振り返った、その視線の先にいたのは……

車体中にあしらわれた、青いファイアパターン。紫がかった先頭車のカオは、お世辞にも趣味がいいとはいえなかったが、今の赤城たちには、それが途方もなくカッコよく見えた。

特筆すべきは、今その列車が走っている場所だ。

線路どころか陸地すらない『海』の上を……その列車は全速前進☆で爆走してい

た。

そして、列車は一瞬にして赤城たちを追い抜くと、突然の事態に完全にボケーつとしていた深海棲艦の前衛部隊を文字通り『轢き殺した』。

ようやく事態を把握……把握？把握は出来ないがとにかく『ヤバイ』と悟つたル級が、一度全艦隊を後退させる。

そして………赤城たちの目の前で止まった、謎の列車。

その中から、1人の……いや『1匹』の鬼が出て来た。全身がまっくろくろすけな、そう、あのヒト……『何か』だ！

吹「……司……令？」

そう、あの謎テクノロジー満載の列車を運転していたのは、他ならぬネガタロス提督だったのだ。

ネ「無事か？お前ら」

加「・・・ええ、まあ・・・」

金「ワ、ワタシは大丈夫デース・・・」

榛「榛名は・・・実はあんまり・・・」

天「つーか、何してんだよ提督！こんなどこ来たらアブねーだろツ！」

赤「そ、そうですね！早く鎮守府に・・・」

天龍と赤城の説得を完全無視し、取り敢えずの全員の『無事』を確認すると、ネガタロス提督は深海棲艦に向き直った。

ネ「こいつらは俺の『悪の組織』に必要な人材だ・・・そんな奴らの命を奪わせたりはしない・・・」

何気に男気を見せるネガタロス提督。何故お前は海の上につ立ってるんだとかツツコンではいけない。

ネ「特にお前ら……『正義の味方』にはな！」

ビシツ！と深海棲艦を指差すネガタロス提督。どっからどう見ても向こうの方が悪の組織っぽい見た目をしているが、そんなことにもツツコンではいけない。

ネ「これから俺は『絶対に勝つ悪の組織』を作る……お前らはその為の前座だ……さっさと死んでもらおう」つげんオウベルト&ツノナデナデ

どこからともなくベルトを出したネガタロス提督。それをカッコよく腰に巻くと、赤と青のボタンを同時に押した。

ネ「……変身♪」ピロン♪

## 『NEGA FORM!』

プワアアアアアアン!!ジャキン!!

とまあ不思議なことが起こって……うん。色々だね。

吹「し、司令が……」

金「purpleの……」

赤「モモに……ッ!」ジユル

加「ダメよ赤城さん」ジユル

榛「え!?!え、ええー!?!」

そう、今ネガタロス提督は、全身紫の趣味のワ……『ハイセンス』な鎧を身にまとっているのだ。

その鎧の名は・・・

ネ「アイム ア 『カメンライダー』・・・」

深「!!?」

突然の他作品のネタの披露に困惑する深海棲艦に猛スピードで突っ込むネガタロス提督。

いち早く我に帰った駆逐イ級は、その華麗なる飛び蹴りで木っ端微塵にされた。

そのまま軽巡ホ級に顔面パンチ！正義の味方に容赦など無用！

り級「グルオオオオ!!（訳：どつかの赤鬼みたいなツラしやがって!）」

ネ「強さは・・・別格だがな（↑なんか通じた）」つネガデンガツシャーソードモ

ド

そして美しい回転斬り！ちよつと装甲硬いだけの重巡り級なぞ、ネガデンガツシャー

の敵ではないのだ。

ちなみに、この艦隊は本気<sup>マジ</sup>の第1機動部隊を苦戦させた強力な艦隊である。だが、打倒正義に燃えるネガタロス提督には、そんなもの屁でもないのだ。

赤「何が起きてるのかしら、加賀さん……」ギョツ

加「さあ……あと頬をひつつふありやにやいでくりやしい（引つ張らないでください）」

吹「ネ、ネガタロス提督強すぎる……」

天（……なんて凄い剣の腕前だ）

榛（司令……カッコいい）ポツ

様々な思いが交錯する中、ネガタロス提督はウルトラスーパーネガタロスペシャルで無双していた。え？意味がわからないって？

大丈夫だ、作者もわからない。

ネ「フン……お前が首領か……」

ル・lite「グルルルル……」

ネ「よく覚えておけ……『悪は勝つのだ』！」つガンモード

『FULL CHARGE!!』

ネ「……沈め」

ル「グルアアアア!!」

ル級から打ち出される特大の砲弾。しかし、ネガタロス提督はそれを後ろ跳びで躲すと、銃口にチャージされたエネルギー弾を、がら空きのル級に撃ち込んだ。

提督の弾丸が直撃したル級は、苦しみに顔を歪めることなく、あっさりと爆発炎上。

艦娘たちを苦しめたル級を、たった一撃で……規格外すぎる火力である。単純計算で火力1000は軽く超えているだろう。

ネ「さて……」ズイッ

全員「!?」

突然こちらを向いてツカツカと歩み寄ったネガタロス提督。その手にはネガデンガツシャーのソードモードが握られていた。

まさか……提督自らの手を煩わせたことに対して、怒っているのだろうか？

ということはまさか……この人は、所謂『ブラック提督』なのか!?

そんな思いが、赤城の中で交錯する。

確かにこの人は悪の組織を作ろうとしていたし……その可能性なら十分ある。

というか、その可能性の方が高い。

しかも、提督が向かって行つたのは、一番損傷がひどい榛名。手痛い攻撃を喰らえば、このまま轟沈してしまう。

赤「……………待ってッ！」

赤城の悲痛な叫びが木霊すが、時すでに遅く、提督は榛名の前まで来てしまっていた。

そしてそのまま……………デンガツシャーを置くと、榛名の頭に手を乗せた。

ネ「……………ひどい怪我だな」ナデナデ

榛「へっ!? あ……………その、すみません……………私の力が及ばなくて……………こんなに攻撃を食らってしまいました……………」

ネ「はやく鎮守府とやりに帰るぞ。お前は、大切な『悪の組織』構成員候補だからな」  
グッ

なんということだろうか。

この提督、悪の組織を率いるような人ではない。正真正銘のピュアホワイト提督ではないか。

この提督を一度でも疑った自身が憎い。赤城はそう思った。

だがしかし……何だこの不安感は。今日をキラキラさせている榛名のことが、ものすごく不安なのだが……。

榛「……司令、お願いがあります」

ネ「……何だ」

榛「榛名を……『悪の組織』に入れてください！」

赤「……は？」

残念ながら不安は見事的中したようだ。そして、割りかし絵的にもヤバイ。大破した艦娘にズイツと寄られる提督という絵はヤバすぎる。主に憲兵的な意味で。

吹「ちよつ、ええー!? 榛名さんツ!?」

金「oh・・・my sister・・・」

ネ「俺について来てくれるのか?」

榛「はい! 司令となら、どこまでもツ!!」

ネ「よし、いいだろう・・・お前は今日から悪の組織の一員だ、榛名。」

嗚呼、マジか・・・

いつもちよつとフワフワしていて、イマイチつかみどころの無かった榛名の心を一瞬で射止めてしまうなんて・・・私の力不足なのだろうか・・・いやでもこの提督だしナア・・・

そんな赤城の思いをよそに、ネガタロス提督は5隻の駆逐艦を轢き殺した、あのナイセンスな爆走列車に乗り込んだ。

ネ「よし、全艦帰投するぞ! 乗れツ!」

榛「こ、これが・・・司令の列車」

金「expressに乗るなんて初めてデース！」

吹「艦娘が・・・乗っていいんでしょか」

天「よし決めた！俺も悪の組織に入るぜ！ネガタロス提督!!」

ネ「フム、お前は初めて見たときから剣のセンスがあると思っていた・・・頼

むぞ、天龍」

天「フフフ、任せろ!!」

赤「・・・」チーン

加「赤城さん・・・ガンバ」グツ

こうして、帰投したネガタロス提督は、長門に説教を食らった挙句、バイクのタイヤ跡を掃除する羽目になりましたとき☆メデタシメデタシ

悪の鎮守府、ネガタロス鎮守府。

次の駅は、正義か、悪か………

【現在の悪の組織加入者数：2人】

# 仕事と一本釣りとクツキー

---

ヒトマル：マルマル  
10：00。

ネガタロス提督は、執務室に1人、黙々と書類作業をしていた。on the 黒縁メガネで。ものすごく滑稽な絵である。

もちろん彼は、今でも悪の組織の今後の活動について考えているのである。そう、考えてはいるのだが……いかにせん人数が少ない。

帰投後、自称『天龍の夫』の龍田とか言う奴に真剣勝負を挑まれ、その薙刀さばきに若干苦戦しつつも何とか彼女を宥め、新たなメンバーとして迎え入れたものの、未だ

構成員はネガタロス提督を含めて4人である。

勿論、その構成員は弩級高速戦艦が1人に、長門ですら『正直敵に回したくはない』と言わしめた天龍と龍田という凄まじいメンツではあるものの、ネガタロス提督の目指す『世界征服』には、まだまだ人材が必要だ。

だから今すぐにも勧誘活動をしたい………したいのだが、この書類作業を終わらせないと、いつ長門が主砲をぶっ放してくるか分からないし、ネガタロス提督を鎮守府（ごう）に送り込んできた大本営とやらからも苦情が来る。

そこで渋々、彼は老眼の入った目を酷使しながら、黙々と書類作業をしているのである。

??? 「……失礼しまーす？」 コンコン

ネ 「ん？ 誰だ？」

??? 「お疲れ様です」 ヒョコッ

ネ 「ああ……榛名か。どうした？」

榛「今お姉様達とお茶会をしまして・・・クッキー焼いたので、もしよければ・・・」

ネ「ほう・・・これは助かる」

メガネをズラして、ネガタロス提督は籠に盛られたクッキーを覗き込んだ。ちょうど、頭を使いすぎて疲れていた所だ。甘いものを食べれば、少しはこの頭痛も治るだろう。

ネ「・・・ふむ」パクツ

榛「ど、どう・・・ですか？」ドキドキ

ネ「・・・これはいいな。また作ってくれ、榛名」

榛「は、はい！司令となら、どこまでもお供いたしますので！」

失礼しました！と言つて執務室から出て行く榛名。彼女の気配りの良さは一級品だ。将来は、誰にでも好かれる、良い幹部になるだろう。

榛名のクッキーに少しホツコリしながら、ネガタロス提督はまたメンドくさい書類作

業に戻っていった。

——《ドアを隔てた向こう側》——

榛（ふう、緊張した・・・）ドキドキ

榛（司令、気に入ってくれたかなあ・・・）

??? 「何やってるデース？はるな？」

榛 「プハッ！・・・こ、金剛お姉様・・・」

金 「ワタシたち、tea timeなんて1秒もしてないネー？」ニヤニヤ

榛 「い、いや・・・その・・・これは／＼」カアアア

金 「ま、妹のLOVEを全力でhelpするのもオネーちゃんの役目ネー！」

榛 「お、お姉様!?べ、別に榛名は恋なんか・・・」

金 「もう顔に書いてあるネー！ライバルのいないうちに、ちゃんとHeartをgetしないといけないデース！」

榛 「ふ、ふえええ・・・」

かくして、金剛姉妹による提督のハートゲット作戦が開始されようとしていたのであった。

-----

ヒトフタニマルマル  
12:00。

ネガタロス鎮守府に、恐れを知らない深海棲艦が攻撃を仕掛けてきた。因みに、提督の着任初日に襲来した艦隊の生き残りが『あそこだけは辞めとけ』と必死に説得したのにも関わらず、である。

こんな正義の味方は処刑するしかない。

早速、執室で作戦会議が開かれていた。

ネ「悪の組織に楯突くとは……いい度胸だ。だが、俺にかかればこんなもの」つ  
ネガデンガツシャーガンモード

長「……そんな物騒なものは仕舞ってください」ハア…

陸「ま、まあ……提督が出なくても、私たちがなんとかしますから」アハハ…  
赤「もし流れ弾が直撃でもされたら危険ですし……」ハア…

取り敢えず俺が全て沈めると言つて聞かないネガタロス提督とそれを必死に宥める艦娘たち。これには理由があつた。

ネガタロス提督はまだ鎮守府に入つて歴が浅く、報告書の書き方もぎこちないものだ。仕方なく、今は長門たちが作ったテンプレを渡して、それを元に書いてもらつてい  
るのだが……

勿論、報告書は真実を書かなければいけない。つまり、ネガタロス提督がウルトラ

スーパーネガタロスペシャルで無双したのなら、報告書の記入欄に『ネガタロス提督がウルトラスーパーネガタロスペシャルで無双しました』と書かなくてはいけないのだ。

当然、報告書は大本営にも送られる。この報告書を見て、面白いと言つて笑つて見逃してくれる人間が、はたして大本営に何人いるだろうか。恐らく、ほとんどの人間が烈火のごとく怒りだすだろう。最悪、ネガタロス提督がクビになるかもしれない。

だからせめて、この1人で艦隊一個師団並みの戦力を持つ提督は、もしものための切り札に使う程度にしないといけない。日常的に使つていては大本営が本気でお怒りになる。

ネ「むう・・・仕方ない。」

長「そ、そう言つてもらえれば」ホッ

陸「本当に」ホッ

赤「助かります」ホッ

取り敢えず安堵する長門、陸奥、赤城。そうと決まれば、提督の考えが変わる前にさつ

さと出撃させなければならぬ。

この提督は悪い人ではない(?!?)のだが、カップ麺をお湯すらかけずに食べるほどせっかちなのだ。食べ方を知らなかったからとかじゃないぞ☆

長「第三水雷戦隊、出撃だッ！敵を見つけ次第（提督が出てくる前に）殲滅しろ！」  
陸「翔鶴と瑞鶴は援護に！前みたいに・lite級はいないわ・・・第1機動部隊はほとんどドック入りだから、その分はお願い！」

全員「了解！」

いち早く修復の終わった吹雪、そして睦月に夕立、川内、那珂、神通の第三水雷戦隊に翔鶴と瑞鶴を加えた大編成を核に、数人の艦娘をつけた、強力な艦隊である。その戦力は、ある意味過剰と言えた。

大丈夫、充分だ・・・むしろ過剰だ・・・負けることなどない。

しかし、長門は何度も編成を見直しても不安な点が一つだけあった。

追加戦力として加えた、如月のことである。

出撃前、長門は聞いてしまった。睦月が、如月に『帰ったら伝えたいことがある』と、嫌な予感が、長門を支配した。

正直、今すぐにも如月を編成から外したい。しかし、もう時すでに遅く、如月たちは海へと駆けて行った後だった。

ネ「……………」ガタツ

陸「……………」提督？どちらへ？」

ネ「少し……………」部屋に忘れ物をした。」

小首を傾げる陸奥をよそに、ネガタロス提督は足早に執務室を後にした。

やはり戦力は過剰だったようだ。

翔鶴と瑞鶴によるアウトレンジ攻撃により、敵艦隊は総崩れ。

本当は三水戦と援護役の如月、回復した榛名、龍田で挟み撃ちにする予定だったが、3人が回り込む前に押し切れるほどの戦力しか相手には残されていなかった。

勝てる・・・これは勝てる・・・

そう思っていた吹雪たち。

しかし、やはりここは戦場。

慢心はダメ。絶対。であった。

翔「きやあ!？」

瑞「翔鶴姉!？」

突如戦場に響き渡る悲鳴。

そう、本来は2人ほど駆逐艦を護衛につけるはずだった空母2人に、勝ちを急いだせいで、護衛もつけられることなく無防備な状態で放置されていたのだ。

しかも、間の悪いことに、翔鶴を攻撃してきたのは、2隻の『潜水力級』。

そう、潜水艦なのだ。

瑞「マズイね・・・翔鶴姉、一度撤退しよう」

翔「・・・・・・・・」

瑞「？翔鶴姉・・・・・・・・？」

翔「・・・・・・・・しえ」

瑞「・・・・・・・・しえ？」

翔「しえ・・・・・・・・しえ・・・・・・・・しえ・・・・・・・・」

瑞「・・・・・・・・？」

翔「しえんしゆいかんいやああああああ!!!」ガクガクブルブル

瑞「しよ、翔鶴姉・・・・・・・・」

戦場に響き渡る翔鶴の悲鳴。そう、彼女は重度の潜水艦トラウマを抱えていたのだ！

瑞鶴。いつもの凜々しいお顔はどこかへ消え、完全に腰が抜けてしまった姉の姿に絶望する

幸運艦と呼ばれた彼女に、人（艦）生最悪の危機が訪れようとしていた。

必死に頭を働かすも、周囲には2隻の潜水艦、そして、完全に再起不能となった姉という最悪な状況を打破できる策は無い。

そうこうしている間にも、カ級2隻はまた狙いを定め始めた。今度は、瑞鶴も一緒に倒す気だ。勿論、空母は潜水艦を攻撃することなどできない。つまり、2人に残された道は、潜水艦に一方的に捌られるだけの未来だった。

・・・・・・・・のはずだった。

直後に瑞鶴の耳に入ってきたのは、何やら古めかしい『船』のエンジン音だった。

みんな忘れてはいないだろうか。

この小説の主人公が、誰であるかを……………。

あの全身真っ黒なアイツを……………。

『FULL CHARGE!!』

ズドオオオオンという激しい爆音とともに上がる水飛沫と力級の爆炎。その水柱の高さは、大和型の46センチ砲を軽く凌駕していた。

ネ「お前ら無事か？」つネガデングツシャーガンモード

2人のピンチに颯爽と現れたのは、我らがネガタロス提督！ネガ電王にはもう変身済

## みだぜ☆

未来の構成員候補を傷つける正義の味方に、情けなど無用なのだ！

瑞「て、提督さん!?!なんでここに……ていうか、何乗ってんの?」

瑞鶴が突っ込むのも無理はない。今、提督は、何故か『漁船』に乗っているのだ。型番? 知らんな。G3-Xとかそんなあたりだろ。

ネ「翔鶴」

翔「……ふえ?」

ネ「お前……『空』の敵なら、勝てるか?」

翔「そ、空……」

ネ「そうだ……お前は『空』の『母』なんだろう?」

突然の謎理論をできる限り説明しよう!

(正しくは『航空母艦』の略だが) 翔鶴は確かに空母である。しかし、ネガタロス提督は

そもそも空母というものがどういうものか知らない。よって、その文字から類推して『空の母』↓『空に関しては無敵』という法則が成り立ったのだ！

え？意味がわからないって？

そんなにガツガツするなよ、これからもつとわかんなくなるから。

ネ「どうなんだ・・・勝てるか？」

翔「・・・わからないです」

ネ「そうか・・・」シヨボーン

翔「でも・・・『勝ちたい』です・・・私の、過去の因縁に・・・！」グツ  
ネ「よく言った。流星は、悪の組織の狙撃手候補だ」  
スナイパー

瑞「ちよ、ちよつと提督さん!?勝手に翔鶴姉を怪しいトコに入れないde・・・」

ネ「そうと決まれば・・・行くぞ！」つロツドモード

翔「はいッ！」キラキラ

瑞「え、ええ・・・」

瑞鶴を完全に無視し、ネガタロス提督は漁船の前方に躍り出た。そう、まだ正義の味方が1人残っているのだ。

狙いを定めたネガタロス提督は、ロッドモードを勢いよく振り上げ……………

釣り糸を、海面に垂らした。

瑞「……………?何やってんの……………」

ネ「静かにしろ、瑞鶴……………これは、俺と力級との戦いだ……………」

瑞「……………ちよつと待って!?!まさか潜水艦を……………」

ネ「……………かかったぞッ!」 f i s h o n !!

力級「キエエエ!!!」 つ釣り糸

瑞「う、ウソオ……………」

そう、ネガタロス提督は最初から潜水艦を釣るために漁船を出してきたのだ!



カ級「キ、キエ!」

翔「こ、これは……………」

翔鶴の眼前に広がっている光景。それは、今まで自分を苦しめ続けた潜水艦が、自分の射程圏内……………」『空』に浮かぶ姿と、漁船の上で竿を振るうネガタロス提督だった。

そう、もう1発FULL CHARGEしてぶちかませばいいものを、わざわざネガタロス提督が『釣った』理由は、翔鶴にトラウマを自らの手で倒して克服させ（ついでに悪の組織に勧誘する為だったのだ！

なんて良い人!なんて素晴らしい上司!!作者が女なら100回告って100回振られてもいいZE☆

ネ「行け……………」翔鶴……………」お前が、さらに羽ばたくために……………」キラーン  
翔「……………」分かりました」つ弓ジャキツ

翔「五航戦……………」空母翔鶴!参ります!!」艦載機発艦!

艦載機「ズバババババババババババツ!!」イママデノ オカエシダー!!  
カ級「キ、キエエエエ!!」空・中・爆・散!!

翔「や、やった……」グツ

瑞「す、すごい……ホントに勝っちゃった……」

ネ「言っただろう……悪は必ず勝つ!と。」シャキーン

瑞「絵面はスツゴイ正義の味方だけどね……」

冷静にツツコミながらも、少し顔を緩める瑞鶴。あんな無茶苦茶なやり方とはいえ、姉は確かに、今までの因縁に打ち勝ったのだ。何はともあれ、全てネガタロス提督のお陰である。

ネ「……よし、2人は先に鎮守府に戻っている。ああ、そうだ。『悪の組織入隊志願書』は食堂にあるからな。」

翔「て、提督は……?」

ネ「……俺はまだやることがある。なに、すぐ戻るさ。」

翔「で、でも……」

ネ「自信を持って翔鶴……お前はもう、立派な『空の母』だ」グツ

サムズアップを翔鶴に向けると、ネガタロス提督は漁船の機関を全開にして走り去っていった。

瑞「翔鶴姉……」

翔「瑞鶴……私、決めたわ」

瑞「悪の組織……入りたいんでしょ？ま、翔鶴姉が言うなら私も……」ヤレヤレ

翔「え？違うわよ」キツパリ

瑞「……へっ？」

今の流れはどう考えても悪の組織に入る流れだ。だがしかし、何故翔鶴は入ろうとしないのか？彼女の真意は何なのか？

瑞「じゃ、じゃあ、どうしたいのよ……」ムムム……

翔「私………」

翔「提督の『お嫁さん』になる！」

瑞「んなっ!？」

なーんということだろう！翔鶴には、我々の予想もできない思考回路が組み込まれているようだ！これは、妹の瑞鶴も思考が追いつかないぞ!!

瑞「は？ちよ、嫁エエ!？」

翔「ちよっと、鳳翔さんのところに行ってくるわ！」

瑞「な、何のために!？」

翔「嫁入り修行よ！」キツパリ

瑞「ええ……」

先程腰が抜けていた姿は何だったのか、一気に元気を取り戻して鎮守府めがけて爆走する翔鶴。

『幸運艦』瑞鶴の苦勞は続く……

頑張れ瑞鶴！負けるな瑞鶴！！

瑞 「何を頑張れば良いのよッ！」ズイツ  
作者 「あ、すみません」

ネ 「待っている如月……」

見事なハンドルさばきで波をかき分け進むネガタロス提督 with 漁船。

彼は今、モーレツに急いでいる。

誰かに言われたわけでもなく、かと言って自分が決めたわけでもない。

ただ、彼の心の中の本能が、彼に囁きかけるのだ……。

ネ「全国の如月提督が……俺を呼ぶ……ッ！」

そう、彼を止めるものはない。

彼はもう、たった一人で艦隊二個師団以上の戦力を持つ『如月ちゃんを救い隊』になったのだ!!

ネ「如月……お前は悪の組織にとって重要な広告塔になり得る力を持っている……絶対に沈めたりなどしない！」

悪の鎮守府、ネガタロス鎮守府。

次の駅は、正義か、悪か……。

【現在の悪の組織加入者数：5人】

## あれもこれも、全部前座

---

敵艦隊陥落の報告が、如月にも舞い込んできた。

(本当はネガタロス提督も出撃済みだったが) 艦娘たちの勝利である。

如「よかった・・・これでもう大丈夫そう」

ホッと胸をなでおろす如月。その時、一陣の風が吹き抜けた。

「やだ・・・髪の毛が傷んじゃう」

女性にとって命の次に大切な髪の毛。それは、艦娘とて同じことだ。髪の毛を整える

ことに専念する如月。

よつて、軽母又級の放った艦載機の生き残りに気がつくことができなかつた……

最後の『置き土産』を残し、爆発四散する艦載機。

その爆発に如月が気付いた時には、もうすでにその『置き土産』は眼前に迫っていた。

如「えつ……」

爆音が、あたりに響き渡つた。

――

吹「ふう……何とか終わりましたね」

神「でも……私たちのせいで翔鶴さんが……」

那「私たちも、まだまだだね……」

先程まで戦場だったこの海に訪れた、つかの間の静寂。

全員、疲れ果ててへトへトになっていたが、傷付いた敵艦隊は撤退を開始しているし、もう安全だ。

川「ちえつ、撤退したら夜戦出来ないじゃない……」イライラ

吹「で、出来る限りしない方がいいですから……」アセアセ

夕「え？夕立、もっと戦いたかったっぼいな」

睦「ま、まあ・・・何はともあれ、みんな無事でよかったです・・・」

睦月はそう言つて海の向こうを見やった。

向こうには、出撃前にある約束を取り付けた如月がいる。

どうしても睦月が伝えたかったこの思いを、帰つて如月に伝えるのだ。

睦「待つててね・・・如月ちゃん」

そう、ずっと溜めていた、この思いを、如月に・・・

ズドドドドド・・・  
(波を切る音)



睦「へ……？なんで如月ちゃんのこと……」

ネ「待っている……全国の如月提督諸君……ッ！」

そう、ネガタロス提督は全国の如月提督諸君の悲しむ顔を見たくないのだ！そんなだから、海面を爆走しようが、月に変わってお仕置きしようが問題ない！

え？漁船？あんなの、自分で走った方が早いから、置いてきたぞ☆

吹「ちよ、ちよつとネガタロス提督！」ガシッ

ネ「なんだ吹雪」キキィー！！

吹「なんだ、じゃないですよ！何してるんですか!!」

ネ「今急いでるんだ。悪の組織に入りたいなら、食堂の志願書に名前を書いて机に置いていてくれ。サインと印鑑を忘れるなよ。」サラバダー

吹「ちよつ、提督つてオオオオイ!!!」

吹雪が後ろでなんか叫んでるが問題ない。

そう、ネガタロス提督は如月を守るといふ使命があるのだ。

今はただ、『守れなかった、あの笑顔』を全力で守り切るだけである。

時速50ノット以上で海面を爆走するネガタロス提督。カッコいい。

そして、それを呆然と見送る三水戦。全員、死にかけのゴライアスオオツノハナムグリみたいな顔をしていた。

とまあ、一般的な小説なら、ここで終わる。

が、しかし、忘れていないだろうか？

この小説のタグ欄に『ア艦これ』、『キャラ崩壊』が付いていることを  
.....

長「ネガタロス待てワレエエエエエエ  
!!!!」ズドドドドドド

軽く目のイッてる長門が、怒涛の勢いで吹雪たちの前を駆け抜けて行く。

鎮守府の業務をすっぱかし、さらには報告書をまた混沌カオスで染め上げようとするネガタロス提督に、長門の怒りは頂点に達していたのだ！

吹「はは・・・あはははは・・・」

高速戦艦すら上回る速さで突き進む我らが提督と秘書艦に、吹雪はもう笑うことしかできなかった。

—————

目を開けた場所は、暗い深海の入り口だった。

ああ、そうか・・・・・・・・私、さっきの爆弾で・・・・・・・・

如月は薄れゆく意識の中、そう悟った。

そうだ。戦場では何が起こるかわからない。

髪など弄っている場合ではなかった。

なかつたけど・・・・・・・・

如「睦月・・・・・・・・ちゃん・・・・・・・・」

脳裏に浮かぶのは、出撃前に顔を合わせた睦月の笑顔。そして、それを影からこっそり見ていた長門、ネガタロス提督だった。

正直、ネガタロス提督が着任するまで、前の提督の死を一番引きずっていたのは、他でもない睦月だった。

それを知ってか知らずか、ネガタロス提督は度々涙を流す睦月の前に現れ、あの『悪の組織』とかいう団体に勧誘し続けていた。

人が見ればバカバカしいものかもしれない。けれど、ネガタロス提督としゃべっている睦月は、以前のような明るい笑顔に戻っていたのだ。

如月には、夢があった。

睦月と一緒に、あの『悪の組織』に入つて……また以前のように笑い合いたかつたのだ。

しかし、それも、もう叶うまい。

如「……………如月のこと……………忘れないでね……………」

最後の抵抗のように右手を伸ばしながら、如月は、海の底に沈んでいった……………

・  
・

如「あ……………れ……………?」

如月は、不意に違和感を感じた。さつきまで沈んで逝くのを体も感じていたのに、今はこう……………何かに支えられているような、そんな気分を覚えていた。

おそるおそる、その目を如月が開けた、その先にいたのは……………

ネ「ゴポポポポポガポポ!」(大丈夫か如月!?)

如「・・・・・・・・提・・・・・・・・督・・・・・・・・!?!」

そう、深海の入り口の、まさに目の前で如月の差し出した右手をがっしりと掴んでいたのは、我らがネガタロス提督！アニメ3話ア？そんなもの、スーパーウルトラネガタロス様がぶち壊してやるZE☆

ネ「ガポポポゴポ」（口を開ける）

如「・・・・・・・・?」

半信半疑のまま、ゆっくり開けられた如月の口の中に、提督は『あるもの』を押し込んだ。

さあ、皆さん。勘のいい人なら、もう気がついているだろう。

そう、彼もまた、『太陽の子』と同じ……仮面ライダーなのだ。

では、分かっている人も、？な人も、全国の如月提督の幸せを願って、こう叫ぼう!!

『その時、不思議なことが起こった。』ピカーン

榛「どどどど、どうしよう……」

龍「落ち着きなさいよ……あの人の考えることなんか、私たちにはどうせ分からな  
いんだから」

その頃、海面では……

如月が爆弾により轟沈する姿を目の当たりにしてしまった榛名と龍田。

無理だと分かっているながらも、全速力で沈んだポイントに駆けつけた。しかし、もう  
すでに如月は海の底だった。

悲しみが、2人を襲った。

2秒くらい。

なぜ2秒なのか？

それは、ちょうど2秒後にネガタロス提督が『待つていろ如月！』と叫びながら全速力でこちらに駆け寄り、海にダイブしたからである。

言っておくが、艦娘は一度轟沈してしまうと、もう2度と戻ってこないのである。そう、この場面は普通悲しいものなのだ。

悲しいものなのだが………

何だろうか、この心の余裕は。

何せ、艦これの『轟沈』というシステムと対峙しているのは、他にもない『黒い黒いアイツ』である。

システムの一つや二つ、ぶち壊しても何もおかしくない。

だつてほら、なんかわかんないけど突然海の中光り出したし………それになんか画面の下の方に『その時、不思議なことが起こった。』とか表示されたし………

イヤーな予感が、龍田の心の中を駆け巡る。普段ドSな人は、突然の事態に弱いのだ。

うわ、なんか………水面がボコボコ泡立ってきたんですけどツツ!!??

ネ「ぬん！」ザッパーン

榛「て、提督ウ!？」

龍「ああ………やっぱり………」

海の中から現れし我らが提督！その腕は、如月をしっかりとお姫様抱っこしていたぞ☆

カツコよすぎるZ E ☆

榛「て、提督………なんで如月ちゃんを………」

ネ「昔、何が起きてても『不思議なこと』を起こして解決する正義の味方がいてな……それを使わせてもらった。」

龍「………無茶苦茶すぎるでしょ………」

ネ「試しにこれを食わせてみたんだが………やはりお前の『クッキー』は素晴らしいぞ、榛名」

そうやってネガタロス提督が出してきたのは、なんと第2話で榛名が提督にあげた『愛のクッキー』だった。

そう、榛名が提督を思う気持ちが強すぎて、愛が籠りに籠りまくったクッキーは、ついには『不思議なこと』………奇跡を起こしたのだ！榛名、恐るべし！

長「ネガタロスワレエエエ………って、如月!？」

如「長門・・・・・・・・秘書艦・・・・・・・・」

長「お前・・・・・・・・ロスト反応が出たのに・・・・・・・・本当に大丈夫なのか・・・・・・・・？」

如「・・・・・・・・はい」ニコツ

如月の儂げな笑顔を見て、つい目から汗を流してしまった長門秘書艦。

なんとということだろうか・・・・・・・・アニメでは遂に叶わなかった、長門秘書艦と如月の再開・・・・・・・・熱い！熱すぎるぞ!!

ネ「少しいいか、長門・・・・・・・・」

長「ネ、ネガタロス提督キサマア・・・・・・・・」ジャキツ

ネ「・・・・・・・・あそこにいるヤツが見えるか？」

長「ん？・・・・・・・・あれは・・・・・・・・」

ネガタロス提督が指差す方向に見えていたのは・・・・・・・・大破したせいで著しく速度の低下した、軽母又級だった。

そう、如月をこんな目に合わせた……悪になら何をしてもいいという思考を持った、憎つくき正義の味方だ。

そんなヤツを、誰が許すものか。

長「提督……少し休戦と行こうか……」ギロリ  
ネ「ああ……仲間を傷つけるヤツに……明日は無い」ギロリ  
龍（アカン……これアカンヤツや……）

そう、ここにいるのは、世界一部下思いの最凶最悪の悪の首領と、世界一駆逐艦を愛する最恐最悪の超弩級戦艦だったのだ！

又級には、明日どころか3分後もないぞ!!

ネ「行くぞ長門……」ライドオン『ネガデンライナー』  
長「殴り合いなら……任せておけッ!!」ジャキッ

龍田は、本気で心配していた。

こんな組織にのこのこ入ってしまった天龍&自分と、この小説の行方を……

ネ&長「ゆ”る”さ”ん!!」

そう叫ぶや否や、ネガタロス提督はネガデンライナーのギガンデスを起動! 照準を又級に向け、一気にエネルギーチャージを開始した。

長門も如月の仇？を打つべく、全砲門に弾薬をFULL CHARGE！全身を赤くたぎらせ、主砲から、果ては機銃掃射用の機関砲まで全ての砲門を又級に向けた。

長「主砲、副砲、機銃全斉射ッ！てエエエエエッ！！」フルバーストオオオオ！！

ネ「必殺・・・・・・・・『極悪☆ネガタロスストーンフラッシュッ！！』ポチツトナ

刹那。

ラーメン二郎の麵もびっくりな超極太ビームが、砲弾マシマシで、文字通り『風を切り裂き』、『海を両断し』・・・・・・・・たつた一隻の、何も抵抗出来ない、大破状態の軽空母に直撃した。

過剰戦力とか言うなよ、ネガタロス提督なんだからそんなもんだ。

又「ア、アンマリダアアア・・・・・・・・critical&overkill！轟

沈!!

ネ「悪は……必ず勝つ。それが俺の目指す悪の組織だ……」  
長「……フツ、あなたには負けたよ……ネガタロス提督」

しつかりと腕を取り合い、握手をする提督と長門。その姿は、まさにいくつもの戦場を駆け抜けた戦友同士だった。

しかも……

榛（な、長門秘書艦が敬語をやめた!?)

龍（秘書艦が敬語を辞める時……それは提督の実力を『認めた』時……  
……と言うことはまさか!?)

そう、長門は、いつの間にか、ネガタロス提督に対して敬語をやめていたのだ。今までは『新参者』扱いだった提督を、遂に長門が……

長「なあ・・・ネガタロス提督」

ネ「なんだ？遂に悪の組織に入る気になったのか？俺はいつでも・・・」

長「・・・違うな」

長門はイヤーな笑みを浮かべたまま、ネガタロス提督に一步、また一步と近づいた。

そして・・・

問答無用で腹パンをかました。

ネ「なつ・・・何をする!？」（（；。 ㄩ。 ）（ ）（ ）（ ）（ ）

長「テメエ・・・色々分かったんだろうなあ!?!ええ!?!」（ \*、 皿 ）

ネ「あ・・・その、すまな i ・・・」

長「謝って済むと思ってるのかワレエ!!??」(#▼皿▼)  
ネ「う…………ぐ…………ヒエー」

龍「…………激おこステイクファイナリアリティぷんぷんどリームの時もあった  
わね…………」

まあ、残念ながら受け入れる気は1ミリも無かったようだ。

帰ってからみっちり8時間説教されたぞ☆

—————

睦「き、如月ちゃん！」バツ

如「む、睦月ちゃん……」ギユツ

睦「うう……」グスツ

如「な、泣かないでよ！睦月ちゃん！」ナデナデ

睦「だってだって……如月ちゃんにロスト反応があつたつて聞いて……それでもう2度と会えないんじゃないかって……だから、私……」

如「……大丈夫。私は今ここにいるから、ね？睦月ちゃん置いて死んだりなんかしないよ」ヨシヨシ

睦「う、うん……」

如「それで……私に伝えたいことつて……何？」

睦「え、ええと、その……」タジタジ

睦「あ、あのね、如月ちゃん……」

如「・・・・・・・・？」ドキドキ

睦「わ、私・・・・・・・・如月ちゃんのこと・・・・・・・・その・・・・・・・・」

如「・・・・・・・・大好きだよ、睦月ちゃん・・・・・・・・」ギョツ

睦「あ・・・・・・・・うう・・・・・・・・」タジタジ

如「もう！折角私も勇氣出して言っただからー！」ムスー

睦「い、いや、その、ええと・・・・・・・・」

如「・・・・・・・・だから、睦月ちゃんからも、欲しいな・・・・・・・・」

睦「・・・・・・・・わ、分かった」シンコキユー



長「……………素直じゃないな。だがそれも、あなたの良い所だ。提督。」

悪の鎮守府、ネガタロス鎮守府。

次の駅は、正義か、悪か……………。

【現在の悪の組織加入者数：7人】